

『マネジメントへの挑戦 復刻版』



一倉 定(著)
日経BP
(2020/6)
1,980円

【感想】

「日本のドラッカー」と呼ばれ、「社長の教祖」として 1990 年代後半を駆け抜けた、不世出の社長専門コンサルタント、一倉定氏。

55年前に、1万社近くの企業に指導した実績によるマネジメント論を掲げ、日本の経営者を震撼させた名著が復刊。

昭和40年に上梓された内容ですが、経営の原理原則そのもので、長い年月が経過しても、全く色褪せない内容で、その手法と哲学に再び注目が集まっています。

『経営は環境に順応することによって生きられるものではない。環境をみずからの力で変革することによってのみ、存続できるのだ』これだけ大きな環境変化のうねりがあるからこそ、原点に立ち返って、理念・経営方針・計画などを立てていくことの重要性を教えてください。

こんな時代だからこそ、絶対に読んでいただきたい一冊です。

【以下引用】

・計画とは、『将来に関する現在の決定』(ドラッカー)である。くだけていえば、「将来のことを、あらかじめきめること」である。「あらかじめきめてしまう」のであるから、当然のこととして「そのとおり実施する」

・計画は“できるだけ主義”ではいけない。「いつまでに完成する」、「これだけ安くする」というように、“これだけ主義”でなければならないのだ。事前に目標を明示して背水の陣をしき、何がなんでもそれを実現する、という決意と責任をもつことなのだ。

・“トップの意志”のないところに、いったい何が生まれるというのか、答えは零である。

・管理とは、計画にしたがって実施し、実績を計画に近づける努力をすることである。

・自己啓発の最もよい場所は、自分の仕事それ自身である。このなかで実践し、実験し、考えぬくことである。

・従業員が思うように働いてくれないというのは、多くの会社の社長の大きな悩みである。従業員が働かないのは、働いても、それがほんとうに自分のためになるかどうか、わからないからなのだ。

自分のためになること、それを最も端的に示すものは賃金である。